

研究

郷土の歴史を探る

(一) 佐伯荘と佐伯院

会員 古藤 田 太

和銅六年(七二三)豊後風土記が大和朝廷に提出された。現在残っている常陸、播磨、出雲、肥前の國の風土記と共に貴重を存在で、この風土記に海部郷の由木や徳門の郷の名が誌されている。

風土記、豊日記、続日本記の記事を総合すると、社護景雲(七六七-七六九)頃、佐伯宿禰久良麻呂が豊後守として赴任し徳門に居り、又延暦四年(八八五)からは海部公常山が引續いてこの地方を治めた。徳門郷に莊園、佐伯荘が開かれ、後には悉く佐伯荘となつたといふ。これら又史実として全くと信じ難いとしても、徳門郷に佐伯荘が開かれ左事は肯べける。佐伯荘は平安後期には望後武士團の棟梁的存在である備方一族(大神氏)の大神惟家の一子が莊官として入りこみ、次第に領主化していつたものと考えられている。

大宰府解文によると、海部の郡佐伯院に職徒が襲来した事と伝えている。(増村常生は天慶四年(九四二)頃としてある)佐伯院というのは、院倉におかれた地域が、こゝ呼ばれるようになったものと考えられ、佐伯荘と云つた大きな面積を指すものではない事は、北川村長井院の場合と考へ併せて肯定出来る。

院倉の制は税稻(延喜式によると上田一町五〇。束の稻一束は米五升に当る。中田一町四百束、下田一町三

百束、下々用百は十束で、その税金に当る税稻は十五束であつた)を保管した。貧者に貸し与えて利を取る制度(出挙)と關係があるわけだ、稻を出し入れする為に大きな倉庫が必要であつた訳である。

「諸國に令して倉を造らしむ、お、おね三等と爲す、大は四千石、中は三千石、小は二千石」とある。

延暦十年(七九二)の大政官符は

「倉は接近して置いては、一倉火を失すると全倉を焼き尽くすので、各倉の間は十丈とし、隨處に寛狹よくしく造るべし。」

現在大分県内でも、野津院、湯布院(由布院)、安心院は、院倉の地であつた事に異論が無いようだ。

延暦十四年(七九五)の大政官符は名文であると共に、現代の政治家に讀ませてやり度い程の仁政を込めてい

「諸國に郡倉を建て、一箇所宛置いたが、百姓が院倉から僻遠であつたり、出て来るのに山川を跋涉する程の不便の地が多く、税稻を運ぶに骨折るやうな事であれば、御毎に更に一院を置いて百姓を救ふようになせよ。」

こうして不便な地には郷院が置かれたことである。海部の郡は何処かに郡院が、場所によつては郷院も置かれたかも知れない。弥生町の上野地又は小倉と云ふ部族があるが、ここには昔々大倉、小倉の跡があると云う伝承がある。院倉の置かれた所であるかも知れない。

徳門郷に佐伯荘が開かれたのは何時の頃か不明である。莊園は天平十五年(七四三)磐田永世私賦法が実施され、

開墾の奨励をするようになったり出来上ったものであるが、天慶年間(元暦)に入ると莊園は益々増大していった。莊園の拡大は政府の力を弱め、自らの力で莊園を護るために武士を生んだ。佐伯院はこの社会情勢の変化のもとに消えた。郡県制度が形骸化して社会の紊乱と共に、やがて佐伯荘が開かれ、荘の安全を保持するたために、何処かの権門寄家に寄進された。弘安四年田帳には名家は毛利判官殿となつてゐる。名だたる大神一族である佐伯氏が荘を寄進して、保護を乞ふのを領家毛利判官とはいかなる権門であつたであらう。このあたり御上吏と探ること以外興味あることである。

弘安八年(一七八五)の國田帳として伝えられるもので、宇佐本、竹田津本、三浦本、鏡群書類従本等数種あるが、鏡群書類従本以外は、佐伯本荘は二十所となつてゐる。当時農耕地二十所とは、容易なことでは開かれなかつたであらうか。堅田六十所は別に明記されてゐるところから、これを除外して当時の状況と考察して見る必要がある。海防、佐伯市街、鶴岡(下野)の水流の大部分は、海潮の關係も灌漑用水の都合から、二十所と云う面積が考えられるであらうか。番匠川の低い水利も、番匠川に注ぐ小河川に沿う追田、追畑が総面積二十所と形成し、それにあつたのは上野附近に先十指と屈する。

豊後國志の地圖と聞いてみると、海部の郡の中央は徳門附近であることに気が付く。更に農耕条件を考慮に入れて眺めると、上野附近は所謂本荘の地にならぬ。本荘は、政府の地を指すものでないが、古市から抜ける道は、佐伯荘の最も大切な幹線であつたであらう。豊後國志の往還もここを抜けて、因尾、切畑、明治地区に分岐してゐる。ここ小倉といちす上野の水流が、古来より

概要な地であつたことを感ずるものである。(この項終り)

三重史談会を歓迎して

二月一日(日曜)三重史談会は、三浦副会長、上野幹事等小外勢十数人、所設場のマイクロパスでお出になつた。迎えた佐伯史談会の高木会長、篠柴、吉藤、山外、玄岡前、根根と交わし、旧藩時代の遺構と前に毛利氏藩政のころの談が次々と出る。そして打連れて旧道から城山に登り、西へ北へ、七、八、天守台と柳茶屋、又眼下に広がる佐伯市街から見る佐伯の港、佐伯湾、豊後水道と、展望をほらいてはす。

城山から下つて山際を歩いて善賢寺へ。そこで毛利家墓所に参拝する。旧城址、城下所、藩公のお墓、又及交と佐伯と、三重所は口金くない史跡も景観など御覽いだいたい左が、皆さん大変楽しんで下さつた。

市役所近く「番匠」で仲よく昼食、お土産は清酒二本を頂いて恐縮であつた。食後、佐伯史談会の運営についてお話しがなつた。幹事から会のこれまでの経過や現状を一通り申し上げ、今年、計画などお伝えする。毎月機關誌を出してゐる、会員数が二百を越してゐるとかお話しがなつた。その外はお互い似たようなもの、その証は意見交換がなつた。賑やかにつづき、又研究情報が披露される。頂いたお酒が披露されて更ににおやりになる。まことに楽しい交歓会風景とはなつた。佐伯史談会としてはじめてのことであつた。

午後四時名残りを惜しむお別れし左が、帰りのバスで一行は白浮遺跡と十三重塔に立ち寄つて見物なされた。